

# 憶良の悼亡詩

中西進

## 【要旨】

万葉集卷五、日本挽歌の前に載せられる憶良の文および詩の語句は、上代仏教文に多く共通し、その点から当代に普通の仏教文の一種と考えることができる。しかしこの文は旅人の妻の悼亡文なのだし、その形もとっているのだから、その枠をのみみ出さずにはいられなかった、憶良の仏教的傾斜を示すものといわざるを得ない。その傾斜とは、世の無明に対する悲歎と、そこから生じた般若への希求である。ここに憶良晩年の、あの人間詩の、重苦しい主題の出發があった。

## 一 序

神龜五年、六月の末か七月のころに憶良は悼亡の文一篇を作っている。万葉集卷五、巻頭の凶間に報える旅人の作につき、憶良の日本挽歌に先立つ文がそれで、悼亡詩が付せられている。

この詩文については、文の前半が仏教、後半が儒教的思考により、それぞれ末尾に「痛哉」「哀哉」と嘆くもので、「蓋聞」「所以」という憶良論理のパターンを踏襲するものだと、かつて

述べた。(1)そしてこの前半の仏教への態度は、後の「俗道仮合云々」の詩文と類型をなすことも述べたが、それでは、この詩文は、憶良の何を表現しどのような作品だといえるのか、この点を説明することが憶良の精神形成史を知る上にきわめて重要な事柄でもあると思われる。

## 二 仏教文の類型

この詩文の素性を知る手がかりは、語句の検討にある。夙に代匠記にはおびただしい語句の典籍による説明が見られる。文の前段では維摩大士には維摩経、釈迦能仁には涅槃経、力負に莊子（大宗師）、三千世界に長阿含経・起世因本経、また二兎に対しては寶頭盧為優陀延王説法経、度目之鳥に対しては文選張景陽の雜詩、四蛇では最勝王経偈、隙駒では莊子（盜跖篇）・史記（李斯伝）をあげた。後段でも同様で、三従・四徳には礼記・周礼、借（階）老には毛詩、独飛に漢書李陵の蘇武に与うる詩、蘭室（空）に家語、また染笥に対しては博物志、泉門に対しては左伝服虔注・遊仙窟をあげた。以上は代匠記の精撰本によって示したが、初稿本でも多少異つ

た例が引かれるていどで、大差はない。詩については順正理論・無量寿経を引用する。

これらの書物は語句の考証のために引用され、契沖の考証学を形づくるものである。したがって憶良のこの詩文の典拠を示したものではない。また近代の諸注釈にも代匠記指摘以後の新たな典籍が多少加えられており、たとえば私注では二胤に仏説譬喻経、独飛に陶淵明詩、蘭室に文選詩、愛河には新華嚴経、苦海には法華経が見られる。井上氏新考も隙駒に莊子（知北遊篇）、四徳に文選の後漢書皇后紀論、独飛に潘安仁の悼亡詩、愛河に文選の頭陀寺碑文が加えられている。ただし碑文には「愛流成海情塵為岳」とあり、愛河とはない。

ところが、これら注釈書の中に「…に拠れるなり」「…に倣へるか」「…に基く句であらう」という捉え方がある。こうなると契沖が説明のために典籍を引用したのとはまったく質的にちがって来る。つまり典拠というものは作品の制作にかかわる問題で、作家の創造行為の分析だからである。もっとも右にあげたものは前掲二著のことばでいずれも故事に関してである。故事はその記された典籍が基で、それに拠って記述されるといふことが当然おこるだろう。しかしこれが単なる語句の場合は話は別で、他にいくつもある諸書を排して、特定の書物に基くとなると、その典籍に倣って自己の制作をなしたということなのだから、重大な問題である。

こうした典拠の面から出典を探られた小島憲之博士は「万葉集の表現」という篇中に「山上憶良の述作」という章を設けて、この悼亡詩文の關係典籍を論じておられる。(2) 博士は愛河なる語は徐陵の丹陽上庸路碑にも見えるが(昌玄経を引用する徐孝穆箋注もあげ

る)、「直接の出典は」新考指摘の頭陀寺碑文だとされる。碑文は「蓋聞云々」で始まり、能仁・雙樹(憶良「釈迦能仁坐於雙林」・大千(憶良「三千世界誰能逃黑闇之搜來」・三界の語(憶良「三界漂流」)、があり善注に維摩の病の語、力負の故事が見え、託生・掩の語も碑文によったと考へ、「自己の述作の過程に於て、この碑文を思ひ出し、その語句を数多利用したものともみるべきであらう」といわれている。

碑文との關係を詳しくいえばこれと直接共通することは序に蓋聞、辭に能仁・三界で、雙林は雙樹とあり、三千世界は大千(序と辭に各一)とある。また力負は序に「高軌難追、藏舟易遠」とあり善注に引用される莊子に「夫藏舟於壑、藏山於沢、謂之固矣、然而夜半有力者負之而趨、昧者不知、郭象曰、方言死生變化之不可逃」、愛河も碑文(辭)はすでに示したごとくで、これ又善注に引用される「瑞応経曰、感傷世間没於愛欲之海、百法論曰、情塵之意合、故知生也、言人皆沈於愛河、則妻子財帛也、言積之多如海、情塵之積為岳」に見えることばである。

この説はその後沢瀉博士の注釈や村山出氏(3)によって支持されているが、碑文そのものに共通することは能仁・三界のみであることが不安に思われる。また頭陀寺碑文が善注頭陀寺碑文を見たとしてよいにしても、もし頭陀寺碑文の語句を利用したのだとすれば、なぜ雙樹を雙林に、大千を三千世界にかえる必要があったのであろう。また力負の故事にしても、「藏舟易遠」でもよく、愛河とすることは愛流や愛海、また情岳でよかったのではあるまいか。それをわざわざ字句をかえたり、善注のことばを用いたりした理由は何だったのだろうか。

およそことばによって制作のあり方を探ろうとする場合、ことばは二種存するかと思われる。第一は一般的なことばで、その作を性格づけるに足りないことば、その第二は、この逆に作者の心情世界をさながらに語ることばである。この前者として今考えられるものが、まず第一に「蓋聞」という冒頭である。これが対策文の形であることをかたて述べたことがあるが(4)、必ずしもそれだけに限らない。天平十年六月に石川年足の記した観弥勒菩薩上生兜率天経の跋文は「稽首和南十方諸仏」として、願文が「蓋聞」から始められ、天平十六年六月写の波羅蜜多経卷五九一の跋文も、勝宝二年四月十五日の日時をもつ穂積老追善の維摩経卷下の写経跋語も「蓋聞」から始められている。また西琳寺縁起所載の金銅阿弥陀仏造像記(勝宝五年正月)も「蓋聞」から始められること、同様である。

西琳寺のものは「蓋聞」以下に仏理を述べ、ついで「是以」として造像の由縁が語られるもので、論述の方法も憶良の文章と同じくするが、頭陀寺碑文も「蓋聞：況：是以」の形をとり、同じスタイルは、あの長谷寺の銅版法華説相図銘(朱鳥元年)にも見られ、これは「惟夫：粵以：敬銘。其辞曰：」という形である。憶良は「竊以」という冒頭も用いる(沈痾自哀文・俗道云々の文)が、これは勝宝六年九月書写の大般若波羅蜜多経の卷三〇〇、卷四二五の跋語に見られる。このように見て来ると、「蓋聞」という冒頭の形式は当時の改まった文体の一つとして、広く行き互ったものだった事が知られ、憶良はそれに従ったのだと判断される。石川年足は他にも仏説弥勒成仏経(天平二年八月)、大般若波羅蜜多経卷三三二(天平十一年七月)の写経があり、その仏教への帰依の強さを知るが憶良と同じような文人の姿として比較されよう。

年足には墓誌が残されているが(宝字六年十二月)、この末尾は「嗚呼哀哉」で閉じられる。そこで第二に問題となるのが、この同様憶良も用いる末尾である。小島博士は文選に頭陀寺碑文(卷五九碑文下)に近く収められている宋孝武宣貴妃誄(卷五七、誄下)、宋文帝元皇后哀策文(卷五八、哀下)を同じ例としてあげられているが、これも上代に多く見ることが出来る。大織冠伝に付せられた貞慧伝には道賢の誄があるが、これは序の末尾を「嗚呼哀哉、仍作誄曰」とし、誄の中には三度にわたって「嗚呼哀哉」がくり返される。また武智麻呂伝の方では刀利康嗣の釈奠文が載せられ、これも「嗚呼哀哉」という。

文選には卷六十の王僧達の祭顔光祿文が末尾を同じく「嗚呼哀哉」で結ぶが、憶良と関係の深い陶淵明の自祭文も「嗚呼哀哉」を二度にわたって用いている。誄・哀・祭を問わず、広く悼亡文の型であったことが知られるのである。

しかし以上の諸例はいずれも「嗚呼哀哉」とのみいうのだが、憶良は「嗚乎痛哉：嗚呼哀哉」という。ところが大織冠伝では鎌足薨去に際して天智の下した詔として鎌足哀悼のことばを載せ、その中では「痛哉悲哉：嗚呼嗚呼」と述べている。文選の哀・哀策文また誄には「痛哉」ということばは登場せず、ここにこれが「哀哉」と併用されていることは、さらに憶良に近いものをこの中に感じさせる。けっきょく、この末尾も当時の哀悼文に広く行なわれたものによってなしたものと考えられよう。

以上は文体にも関するものだが、語句そのものでも、三界・四生などという語は当時の仏文(仏教関係の文)に頻出する。三界には登仙者生淨国、昇天上聞法悟道、修善成覚、三界含識、六趣稟

靈(神龜五年、大般若波羅蜜多經卷二六七跋)

廻邪歸正、超過三界、遊歷宝刹(勝宝四年、説一切有部俱舍論卷二跋)

同露三界 芝契一真(勝宝四年、仏足石記)

その他がある。第一のものはいわゆる神龜經で長王發願、檢校僧は弁基(春日老)と憶良同行の遺唐僧道慈である。四生も(憶良「四生起滅方皆空」)

以此願力、七世四恩六道四生、俱成正覺(推古三十六年、法隆寺金銅釈迦三尊造像記)

得但四生、殊菓六道、各因所以(前掲。齊明五年?、西琳寺金銅阿彌陀仏造像記)

是依六道四生人等、此教可相之也(天智五年、野中寺金銅弥勒菩薩造像記)

乃至六道四生衆生、俱成正覺(持統八年、法隆寺觀音菩薩造像記)

悲雲覆三界、熒四生於火宅:遍施四生、俱登覺道(前掲。天平十六年大般若波羅蜜多經卷五九一跋)

その他がある。これら二語の内四生は頭陀寺碑文にはないが、兩語とも仏文なら当然でて来る語であろう。煩惱(憶良「苦海煩惱」)も「滅除根本無明十地罪障、一切微細所知煩惱」(宝字三年、道璿和上伝纂)に見え、同様である。

これらに比べるとそれほど頻出するわけではないが、伏願契道能仁、昇遊正覺(前掲。天平十年、觀弥勒菩薩上生兜率天經)

非有能仁、誰明正法(神護景雲二年、十誦律第七誦卷四二)

という能仁(憶良「釈迦能仁坐於雙林」)や

空对泉門 長悲風燭(慶雲四年、威奈真人大村墓誌)

という泉門(憶良「泉門一掩」)も仏教的哀悼の文なら当然あって不思議のない語である。また天平三年八月十日の写経目録には「般泥洹經一卷」、同八年十一月二十四日の写経請本帳には「般泥洹經一卷」が見え、泥洹(憶良「無免泥洹之苦」)という語も当時の知識人には珍しいことばではなかったであろう。

このように、「蓋聞:嗟乎痛哉:嗚呼哀哉」というスタイルのみならず、三界・四生・煩惱・能仁・泉門・泥洹といった憶良の用語が他に多く見られるとすると、この文と詩はそれらの一つであり、どうも頭陀寺碑文とこれとを直接結びつけて考えることが難しいのではあるまいか。

これに対して力負その他、故事をもって語られることばの出典はより排他的なものと思われる。しかし頭陀寺碑文のそれはすでに掲げたごとく「藏舟易遠」であり、憶良が故意に類同をさけて力負と用いたという考えもできるが、神護景雲四年に修榮の撰した波羅門僧正の碑文には辞の中に

藏山易速 闕水難息

と用いられ、頭陀寺碑文の用い方よりこの方がむしろ近い。

また能仁も雙林(樹)ともどもに用いられる場合は近似を考える事が可能である。しかし碑文の方は辞の中に「皇矣能仁撫期命世」とあり、雙樹の方は序の中に「然後扞衣雙樹脱屣金沙」とあるもので、語としては結びつけて記されたものではない。この後者の善注にも能仁ということばは用いられず、「爾時世尊臨涅槃」と記されている。

同様に考えれば二兎・四蛇も物語をもって伝えられることばで、制作にとつては大きなことばであろう。ところがこれもわが国上代の仏文に見ることが出来る。東大寺要録所収の大仏殿曼荼羅織銘(勝宝六年発願)の東曼荼羅左縁文は「竊以…伏惟…粵以」という文体のもので憶良文とひとしいが、その東縁文には

唯閔川易往、驚電難住、恐二兎侵害、四蛇來纏

と見える。それによって聖武が崩じたというものである。「閔川易往」は先の波羅門僧正の碑文では力負の故事と対になっていた。また唐招題寺蔵大般若波羅蜜多經卷一七六(宝龜十年)の跋文も「夫以…伏惟…」という文体によって

豈是謂四蛇侵命、二兎催年、報運既窮、奄然去世

という。ついで記される「孝誠有闕、慈親无感、泉路転深、終隔親見、仰天伏地、而雖悲歎、都無一益、空沾領袖」も憶良の文章を連想させるように思われる。これらによれば契沖のいうように賓頭盧為優陀廷王説法経を直接繙かずとも、この故事は当時の人士に親しいもので、それが右にも憶良にも現われたと考えるべきであろう。

これら力負・能仁の雙林・二兎四蛇はいずれも故事・由縁をもつた語である。それなりに、出典と直接交渉を持たぬ先の語とは性格が異なるが、しかし反面、単に知っていて用いたまでだという場合がある。これに対して愛河・苦海という語はまた別である。「人皆沈愛河」という人間の捉え方、あるいはこの世を苦海とする精神、そこにこそ人間を背負い込んだことばの重みがあるだろう。憶良は詩の中でこの愛河・苦海の二語によって現実を捉え、本願を淨刹に生きむことに求める。淨刹に生きるという願いのことばにこそ憶良のこの詩文の最終的性格があった。したがって、そのようなことばの

世界にこそ、この憶良述作の真意があらう。

実は右に引いた宝龜十年の波羅蜜多經跋文は、最後のところを

般若之船、深於苦海、速到極樂之寶域、大乘炬煥於閔、懼早登摩尼之玉殿、永覺三界之夢、長息一如之床、広及有識、共出迷護、到涅槃岸

と結んでいる。涅槃の岸に対する苦海は迷護の世界であり、三界の夢であった。そこに「託生淨刹」という本願も出て来るであろう(本願という語は前掲東曼荼羅文にも見える)。頭陀寺碑文では「託生王室」というものである。

以此功德、剏神靈生淨刹、斷愚癡証円覺(宝龜四年、高野山神光寺蔵成唯識論分量決卷一跋)

淨刹に生きることが愚癡を断つことである。苦海はこの愚癡の世一界なのだが、苦海と淨刹とが共々に見えるものとしては、やや時代を下るが、道澄寺の鐘銘(延喜十七年)がある。その序の一部である。

非唯現世結契關之情、亦欲淨刹共安養之樂…且將令長夜昏迷

聞妙声、而知曉苦海沈溺、驚梵叫而通津

苦海に沈溺する状は長夜の昏迷といってもよく、その中に淨刹が欲せられることは、憶良の心境と同じである。

愛河も、憶良詩に苦海と対句となっており、同様に考えられる。その愛河なることばを用いてこの間の事柄を述べるのは、三船撰する大安寺碑文(宝龜六年)である。

於是浮般若之舟楫、拯溺愛河、善菩薩之津梁、救焚火宅、遂使不言之化、施浴四生、無縁之慈、沢周三界(四生は領中にも一例)かつて憶良と三船との仏教に対する相違を述べたこともあるが、

一つの既定として愛河の救済を述べるのが三船であり、その中に沈溺するのが憶良であっても、基く仏理はひとしい。

かくて、愛河・苦海そしてその果の淨刹に生きる本願は、憶良の悼亡詩の中心をなしながら、多くの類同を同時代人の文章の中に見る結果となった。すなわちこの心情のあり方においても願文などに見られる上代人とひとしく、またひとしいことばによってこの詩文をなしたのだということができ、さらにことばのみならず発想の状況をよく類似させる上代仏教文がある。常樂寺藏大般若經（宝字二年）の書写は沙弥道行の發願によって優婆塞円智の行なった由が卷九一の跋文に見えるが、まず勝宝九年六月三十日、

沙弥道行、慕先哲之貞節、遵大聖之遺風、捨忌俗塵、賤於蟬脫、不愛身命、輕於鴻毛、独出里隣、遠入山岳、収穢累之逸予、卷瀋放之散心、儼然閑居

という。まさに憶良のいう山沢亡命の民である。ところが「是時」山頂に雲起り雷鳴とどろき「天罰」にあう。そこで

則願曰、区々下愚、失魂畏死、况乎国家之愛生乎

だから大般若經六百卷を写したてまつらむと誓うと雷鳴はさり、やと正氣をとりもどす。よって

以為連河能仁、設般若之宝筏、雙樹正覺、開菩提之禪林、誰不渡愛河者、乘彼宝船、出迷路者、休此芳林者也

という。道行は「道行無智有欲、無德有貪」として多くの知識をかたらって写経したというが、憶良には山沢に亡命する勇氣もなく愛河に苦しんでいるのだから、比べものにならぬ重苦しきがある。そのような相違はあるにしても、当時の人々の仏教に対するあり方、能仁・雙樹ということばや愛河という語によって語られようとする

人間のあり方を如実に示しているであろう。憶良のこれらのことばも、さらにはこれらのことばによって語られるこの詩文のあり方も、かかる上代仏教文の一つに他ならないのである。

### 三 般若

右に多くあげた愛河・苦海の文章は、幾つものものが、般若（船・筏）に乗じてこれを脱れんことを述べている。例示した諸文も般若經の跋文である場合も多い。そこに看過し難く浮かんで来るのは、般若（慧）というものである。憶良が淨刹に生きるのも、この般若によってであったはずである。

もとより般若は大般若經によってのみ説かれるものではないが、これも当時すこぶる流行していた。右に述べた道行の写経が六百巻といっておき、これは玄奘が竜朔三年（天智二、六六三）に到って完訳したもので、当時行なわれていたものはこの經典と思われるが、続紀にはこれを読ましめる記事が多い。それに写経の行なわれたものを加えて表覧すると、つぎの如くである。表中、（心）は般若心經を示す。写は写経の意、頭の算用数字は月、下段に關連經を添える。

大宝三（七〇三） 2 四大寺に読ま

しむ

和銅五（七一二） 11 写（長屋王）

養老五（七二一）？ 写

神龜二（七二五） 関1 宮内に転読

8 写

三(七二六) 12写

四(七二七)

2 金剛般若経

五(七二八) 5写(長屋王)

天平二(七三〇) 3写

七(七三五) 4写5宮内、大

8 金剛般若経

安寺ら四寺に転

読

九(七三七) 4・5・8宮内

に転読

一一(七三九) 7写(石川年

足)

一三(七四一) 3天下に写さ

しむ3写7写

一五(七四三) 8写

一六(七四四) 5平城京に読

ましむ6写

一七(七四五) 7写9京師お

よび諸国に百

部を写さしむ

一八(七四六)

3 仁王般若経

一九(七四七) 11写

勝宝六(七五四) 9写9写

七(七五五)?写(心)

宝字二(七五八)

7 金剛般若経

以上によっても知られるように、大般若経は八世紀の前半に盛行し、ことに天平期には尊重されている。しかしそれに先立っても転読が見られ、なかならず長王の大きかりな和銅・神亀両経は憶良の時代である。憶良は前者を目のあたりにし、後者を遠く筑前にあって仄聞した。しかもそれは問題とする詩文の作られた一・二ヶ月前である。神亀四、五年には写経所に大般若用の紙が受領されており、あわせて一万八千余張にのぼる(正倉院文書、写経料紙帳)。長王発願のためのものであろうか。

また右の表中にも天下に写経を命じた統紀にあわせるように民間の写経が残されている様子が見えているが、それはこの経典が朝廷や一部知識人だけの所有ではなくて、広く民間に滲透していたことを示すであろう。そのことを別の面から跡づけているのは、正倉院に残る智識優婆塞らの貢進文で、貢進された者どもの読誦する経文の中に、多く大般若を見ることができる。しかもそれは多く呪であり、陀羅尼である。むろん中には大般若六百巻を読経する者もあるが、中には心経を誦経する者もある。その内容はかくさまざまだけれども、これらによっても般若経の広い受容は容認されるであろう。

しからば般若経がこのように盛行したのは、なぜであろうか。右にふれた天平十三年の天下への写経の詔は、この経典について、つぎのようにいっている。

案経云、若有国土講宣読誦、慕敬供養、流通此経王者、我等四王、常来擁護、一切災障、皆便消殄、憂愁疾疫、亦令除差、所願遂心、恒生歡喜者

つまり表に示されたような朝廷行事としての転読は国土安泰の祈

りであり、その証拠に疫病の猖獗した天平九年には三回にわたって大がかりな読経が行なわれている。これ以外にも大般若経の行なわれる時には災障を除く為だという一句が添えられるのが統紀の普通である。しかしこの事はむしろ言うまでもないことで、王者にとって兵戈なく国土安穩ならんことの功德を説き、民衆にとっては災病なき安穩を施すものと信じられていたようである。

だが、右に多く同類の文章を見た上において、もし憶良が波羅蜜(到彼岸)を願ったとしたら、もっと本質的なかかわりを般若にもったのではないかと思う。般若はさまざまに説かれるようだけれども、慧は一切愚の黒闇を遠離するものだという(方便慧)。慧を以て衆悪・愛・瞋恚・無明を除き、智を以て生死を除く。慧とは智のことで能く除くことだとも説く。

憶良が「愛河波浪」「苦海煩惱」という時、このような愚癡の黒闇が身をせめていたにちがいない。その無明を脱して淨刹に生きることを彼は願う。とくに凡人の衆悪、瞋恚をわが身に見出した老憶良は、いい難い絶望の淵に沈淪していったことだろう。しかも「愛河」というその愛、これは愛欲というよりは恩愛や我愛であったが、これに呪縛された現し身の執着は、慧の無執着に、はげしく憶良の心を誘ったにちがいないのである。

大般若経によれば般若波羅蜜多を修行する時は、無明はただ名のみありという。行・識・名色・六処・触・愛・取・有・生・老死愁・憂・苦・憂・惱はただ名のみありという(学観品)。教典の常として、こゝでも飽くこともなく繰返されるのは「無明乃至老死愁苦憂惱」という現し身の苦惱のことばである。これは遠い地鳴りのように、憶良の心にひびきつづけていたのではなかったらうか。

謂ゆる無明に縁りて行あり、行に縁りて識あり、識に縁りて名色あり、名色に縁りて六処あり、六処に縁りて触あり、触に縁りて受あり、受に縁りて愛あり、愛に縁りて取あり、取に縁りて有あり、有に縁りて生あり、生に縁りて老死愁苦憂惱あり。若し無明滅すれば則ち行滅し、乃至生滅すれば則ち老死愁苦憂惱滅せん(無所得品)

という。無明乃至老死の惑業への思いは、旅人と違って讚酒といった術もない憶良を捉えて離さない。

宗教とは残酷なものでもある。

或は身を受くる所眼無く耳無く鼻無く舌無く手無く足無く、癰疽疥癩風狂癩癰癩殘背癩癩癩癩癩にして諸根欠滅し、貧窮・枯頓・頑嚚にして識無く凡て人に皆輕賤せらるる有り(辯般若品)

この穢土の実在はどうであろう。あの莊嚴の仏土はかかる現世の下に光輝をいや増すのであり、般若波羅蜜多を信ぜざれば「自ら其の身を陥れて苦海に沈溺し、亦他人陥れて苦海に沈溺するなり」(同)という。現世を語ることはさらにつきのようにもいう。「旃荼羅の家補羯婆の家及び余の種々の貧窮卑賤不律義の家……。瞋盲瘡癩、攀躑根支不具、背癩癩癩および余の種々の穢惡の瘡病……」。また害生命、不与取、欲邪行、虚誑語、危惡語、離間語、雜穢語、貪欲瞋恚邪見と(巧便學品)。

憶良は生涯を学芸にたずさわった人間である。この凄惨なりアリズムを、敏感な感受によって、大きな動揺をもって受けとめたにちがいない。

憶良は時に六十九歳。四歳にして故山を離れ日本に漂泊して以来、思えば長い生涯であった。典籍の中に埋もれてすごした青春、



遣唐少録として脚光をあびた日以来、今は筑前の大守という地位をすら獲得することができた。しかしもうこれ以上の榮達は望み得べくもない。そのような時点に立ってふりかえった時、一途だった生涯は、あまりにも現世的であった。かえり見て憶良の心を寒からしめるものは、その空しさだったのであろう。

しかしこの時まで、憶良は多くの教典をむしろ学問として享受する面があつたらうし、おのが内面に照らして見る事は無く歩いて来たと思われる。ところが般若経のことばが実感となつて、今訪れた。そうさせたものは、親しい旅人の妻の死である。しかも十分に年若く美しかった女性の死であつた(6)。この衝撃が「四生起滅方夢皆空」といわせる。愛河・苦海の思いが忽然と心にひらけるのである。憶良はこれ以前の作の中に、憶良の特質とされるような苦渋にみちた詩歌を一切見せない。そしてこの詩文以後、日本挽歌を経、嘉摩三部作の中に、愛河・苦海の思いは歌いつがれていく。憶良を憶良たらしめたものは、紅顔の女性の死であり、その激しさに堪えた当面の詩文はその出発の作であつた。

#### 四 結

憶良の悼亡詩および文は、たしかに旅人の妻の死に対する悼亡の詩文である。それは後段の「紅顔共三従長逝」以下の頌辞や、残されたものの悲しみを述べる点に顯著である。しかし、憶良は悼亡の要請の中に詩文をつづりながら、前半をついに無常悲歎の語句でおおってしまった。なかならず詩にはもはや他人の死の哀悼はまったく影をひそめて、自己の感懐の吐露に終始してしまつてゐる。

この無常の悲歎は当然仏教的言辭によつてなされる。そこに前半

が仏教文——願文や墓誌・寺院碑文と共通する語句をとまなう結果を生じた。これは、その事自体普通ではないから、文選所収の誄・哀・哀策文にも共通するところがないわけである。文選では卷六十にも弔・祭の分類を示すが、ここでも前掲の王僧達の祭顔光祿文一首の末尾を除いて共通するところがない。陸士衡の弔魏武帝文一首も詠歎的な詩文だがきわだつた類似はない。これらは所収諸篇の仏教に關係するところ薄いゆえである。したがつて唯一の寺院碑文たる頭陀寺碑文にのみ能仁・三界といったことばが登場する結果ともなつてゐる。

この事を逆にいえば、仏教關係の文章を探れば多数共通語がある、ということでもあり、同じ上代仏文には、おびただしいといつてよいほどの類似のあつたこと、上に見たとおりである。しかも憶良は、これらと語句を共通させるのみならず、感情的にも、さらには思想的にもといつてもよいほどに共通したものを見せた。彼はそのような当代文人の一般の思想に従い、語句を同じように用い、しかも正格の文体によつて悼亡文を記したのだった。一体に、憶良には、一篇の詩歌全般が基づく一篇というものが存在しないのではあるまいか。たとえばすでに大野保氏が指摘されたように、懷風藻の紀末茂、臨水觀魚の詩は張正見の釣竿篇そのままである(?)。このようなことが起こり得るのは、外国語によつて外国の詩形を作るといふ距離によつてであり、長く漢籍に親しんだ帰化人憶良には、起こりようもないことであつた。故事ないしは名句を用いるということとはこれと異質のことで、たとえば同じ懷風藻に例をとれば

筈者所以在魚、得魚而忘筈(莊子外物)

得魚忘筈(嵇康「贈秀才從軍」十九ノ一)

忘筌陸機海（藤原宇合「遊言野川」、懷風藻）

といったごとく、けっして嵇康や宇合は模倣しているのではない。憶良のあり方もまた、かくの如きであるのが、彼の自然の姿であった。

しかし、憶良のこの一篇が当常用の語句を用いているといっても、その中に埋没してしまう体ものではない。それは、この一篇が悼亡文でありながら仏文と類似するというあり方も一体の事柄で、死の衝撃の中に求めていかざるを得なかったものがこれらの語句であった。だからこれらのことばは、いっそう強く憶良の感情を背負ったものとして捉えねばならないし、そう捉えることの正しさを支えるものが、悼亡から逸脱して感懐詩たらざるを得なかった、詩のあり方であろう。

本来この悼亡詩（文）は旅人の妻の死を契機として作られたものだから、当然謹上されることを予測したものだったと思われる。しかしこの一篇は謹上された由の左注もなく、題名も記されていない。またこの文が詩の序のような位置にはあるけれども、末尾を「其辞曰」とか「猷弔云爾」とかといったつなぎ方にはしない。あくまでも「俗道仮合云々」の詩同様併記するだけである。そして既述の如く詩は悼亡を主としてはいない。文章の格をととのえながら、全篇としては完全ではないのである。この一篇がそのように終ったのは、けっきょくこの作が旅人に献せられることなく終ったことを意味してはいまいか。そうなった原因を、悼亡文からの逸脱と考えるのである。

こうして、単なる哀悼儀礼文の枠組みの中にはとどまり得なかったのは、根強い憶良の個我である。しかもその個我は、従前の宮廷

官人圈における作歌態度から覚醒して、世の無明に驚き、般若への希求となって誕生して来た。潜在の中に貯えられて来た意識だったろうが、この意識は仏典を教科書から人間の文学へとかえた。親しき者の、忽焉とした死がその契機である。

この世の中へのまなざし、人間への思索、無明への絶望と慧への願いは、この一篇をもって始められ、以後の憶良の作品主題を塗りこめる。憶良の絶望と慧の希求とは、異常といってもよいほどに深化していった。だから、それを知る者にとっては「従来厭離此穢土」とは、まことに公式的に見えるだろう。それがわたしをして信じ難くさせたこともあったが、それも実は目醒めの初々しさだったのである。以後の諸作には慧の希求そのものが苦痛であるような痛ましさがある。かつてこれを狂慧と呼んだことがあったが(8)、慧を希求しながら、狂慧に陥没していったところに、もっとも憶良らしい姿があった。今日詩人としての栄光は、この上に与えられているのである。

註1「憶良の大陸的思想」(日本文学の争点上代編所収)

2「上代日本文学与中国文学」中卷九七九頁—九八三頁

3「日本挽歌——主としてその構成について——」万葉五七号

4「万葉の中国思想」(拙著「万葉史の研究」六二八頁)

5「相剋と迷妄」(拙著「万葉史の研究」五三五頁)

6辰巳正明氏「日本挽歌の『妻』」古典学三号

7「懷風藻と六朝初唐の詩」(「懷風藻の研究」一九五頁)

8「天平の狂」国文学一五卷一一号